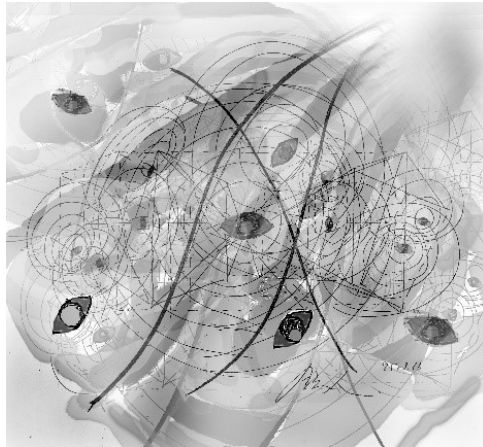




空中オルガン 白花の貌ポートレート



思考の灰色の血が流れる 断面図

空中オルガン

堀田
展造



BASE KOBIKI

〈目次〉

空中オルガン―他者亡霊論の研究―

生きてゐる仮面の死者 13

日蝕の森 23

不明者 27

病んだ肺 33

置き去りのピアノ 39

すべて触れない楽譜にすぎない 45

白夜

腐食する蓋 51

雨季 54

流星 56

純粹劇場 58

白夜 60

〈epilogue〉 63

〈あとがき〉 常套・余白・亡霊・詩 66

〈引典〉 71

空中オルガン

―他者亡霊論の研究―

……最初の道を左へ。懸垂下降。……地平線の誕生。これは漠然とした厳密性という問題である。……みんなのうち誰が死んだのか？
……脳の砂漠地帯。鷲座通りの中庭にある花盛りの三本のマロニエの木。母はいつも手前に存在する。これが出現の本質だ。……曲がり角の農場で彼らは立ち停まった。問題は卵だ。……曲がり角の手。……軌道を屈折させること。自分を軸として旋回すること。たいしたことじゃない！ クリナメン機械。……藻の微笑。そして彼はまた私に話しかける。双子葉。ペールのバルサム。緑色の太陽。ブラックコーヒー。私は歩いた。私は値切った。途方もない約束。現行犯。

——フェリックス・ガタリ『リトルネロ』より抜書き

宇野邦一・松本潤一郎訳 みずず書房

生きている仮面の死者

へふと立ち止まり

いつのこともかは消え去り 　　∨

空っぽの　　黒い蒼穹にも見え

金鍍金の闇　　太陽は反射を失う

湧き上がる針　　針　　針

視線の宙へ揮発し　　すぐに目の奥に凝着し

増え続ける光の針先　　太陽は猛りながらおのれの陽炎に溺れる

現れ／Apparition?　　だが眼差しは

闇の中の真空の穴にすぎない　　なにも見ていない

ずっと前からそうなのか　　わからない

夢が夢を食うように　一柱の噴水が空気を貪っていた

〈夢の中の夢〉

陽炎の薄肌が青紫に染まっていた

水柱が背骨を駆け上る

俺は夢の中で光る噴水の迸りを飲み込んだ

かく言うずれた言葉らしき気体の光房も

夢の中の夢ゆえの　一続きの　尽きない不凍の泉水のように

(陽炎はかげろうにすぎない)

現れ／phantom?　——抱いたのは薄衣の煌めきと揺らぎだった

昏い水鏡に浮かぶ仮面の目　貌のない貌

探り合う眼差し　の穴　おお　断じて俺ではない

水を這う喉笛　鋭い息遣い　——俺は語にならない息の塊の中に溺れていった

〔「滑らかな死の瞬間」などと言う……今や亡霊の自由のみが夢想を
統御する……俺は淀みない口調に納得し全てを委ねる　だから全
て俺ではない！

たとえ死者のものともいえない盲目の仮面を挟み　ゆえにたぶん俺
のものともいえない仮面のお前　こいつと不可解な応答を重ね合わ
せているとしても！

俺はつねにその通りに書いていただけだ　夢の中に飲み込んだ言
葉らしきものがそう納得しているんだ〕

*

〔胞子を噴き海藻が黒々と揺らいでいた　新生に泡立つビオラの文
脈　岩盤に張りついた褐色の記憶〕——　凡庸な夢の水中だ　俺
は水流の揺らぎを追いかけていた　皮膚を透す水の光　どこから
発しているのか知らない

phantom
夢想の虚像は至上の装飾か

濡れた薄衣 白い肉髯が色づく

変幻の冷熱肌 緑色のレースの魚体 骨はない

夢想の虚像ならば〈お前〉は永遠に中性のままだ！

白煙の温りが証拠の薄いドレスを膨らませていた

(虚像が証拠だと?)

俺は凡庸すぎて虚しい掌を開く

冷たくも熱くもない親和の夢地

やがて微かな光眸も減衰し まろやかな肩レースの輪郭も失い

だが閉じることのない目の穴 なおも仮面の底を探り合う

ありえない死者の自写像のように

phantom
〈お前〉 無底のまなざし

phantom
〈お前〉

*

「薄衣をなぞり 〈お前〉と書く度に 書字の彫影が〈お前〉を闇の底に沈めるだろう 避けられない暗喩というものだ」…… ガラス窓越しの書に書かれてあった

半睡に射し込む文字の翳 午後の白い窓を揺らし

〈死者の自写像 疫病の船倉 中性の街 慎ましい泰平の泥埃に埋もれ これらすべての語の宮殿は万能の光質を埋蔵するらしい……〉

積上げた書字 phantom 〈お前〉 過剰な文字の菓子よ

暗喩は蜜だ！

空の煌めき 不可解な明るい闇

解き放たれた無辺の鏡窓

(煌めきは暗喩なのか 闇の生成は必然かどうか知らない)

〈お前〉は影を持たない！

滑らかに鏡面を透過し　不毛の成り行きどおりに

〈お前〉は最後の薄ドレスの鏡像をも脱ぎ捨て　消える

微かな温もりと柔らかな光質

〈お前〉という語の底　向こうにひろがり

〈闇も他者も　けっして鏡に写らない！〉

*

白けた朝陽が傷文字の骸を晒していた

ぼんやりと　犬顔の素面　擦傷だらけの白茶の一日

意匠を凝らした星座のイデー　プラスチックの勲章

わずかでも光に舐められた物陰たち

未明の屋根屋根が潤んだまなざしを宿していた

塩素の苦い気道

這い出る長い蔓草

ありえない亡霊の襞衣に染みたインクのように

そいつの蒼白の自写像のように！

かく言う唇になおも鉛の文字の傷を重ね

*

狂った陽炎

不死を驕る焰

桜色の熱病を吸う

揚々と〈a mortal〉肉を斬る

虚無の中空に地平線を引く

そこに滾る身を屈め

誰のものでもない透明の噴水が身を振っていた

天空に飛び散る雫 雫 雫
透けてゆく仮面の頬を流れ
剥き出しのガラスの脳が割れる

地上のすべての稜線を引き寄せるべきだ

地続きの冷静の観測線を探すべきだ

(語が綾なす線 そのその透明について盲目であってはならない！)

だから 屈託なく 膝を屈し謙虚に請うんだ

「いったい何が消え去ったというのか」と

.....

喉につき纏う灰の匂い 不遜と虚言の

しよっぱい霧氷^{ガス}の唇よ

現れのみを刻印する 紙片の表裏のように

ありふれた野火の奔放な焰のように

中性の素顔を曝け出し

少年の鉄錆の匂いがしたはずだ

血を分けた仮面の 変わらぬ温もりの中

燼灰から生まれる花唇エクリチュールの囁き

きつと忘れかけていたんだ

太陽が凡庸に陽炎に溺れる

誰かが描いた岸辺の花々 その誰かが言う

(平面ある 織布テクストと記譜の色)

(入れ替わる文字トトロジの形 傷を知る色布)

途切れなく織り続け

陽炎にすぎない〈お前〉の骸を覆う ありえない織物なんだ

否と言う 生きている〈お前〉……

日蝕の森

迷い込んだ日蝕の森

夜通し歩き続け

波立つビロードの偽夜　水は死んでいた

熱病の沼　うなだれた緑葉たち

苛立ち　翳り　野獣めいた波動

俺はエメラルドブルーの天空を抱いた

湖底に潜み群なす鳥影が金環を啄んでいた

青白い黴の夏がセロファンを包む

一億の死体を積んだバス　星のイデーを刻印した黒い書

絵師が太陽の焰を浴びる鳥影を真似る　真似る

〈錯誤のオペラ〉

朽薔薇色の惰性　ピンク色の蚯蚓が躍る

真黒の昼の月影が浮かぶ　山頂の秘儀のように

葬壇の階段を昇る火影の群像たち

電飾の皮膚　非情の大河の色彩　齟齬はなく

見えるままに　継ぎ目なく

執拗な永遠のオペラよ！

「私は方向を見失った……」　陶酔の台詞を呟く

（観客は観客であるとは知らず眠っている

甘美な煤煙　壮麗な擬態の宮殿

紛いなく一億の死体はあった）

闇の中を重油の貨車列が交錯する

森に通じる仄暗い頭蓋骨の中に

自演が仕込まれた狂おしい錯誤であろうと

なおも繁茂する化石の森
鎮まりかえる沼色の街

遅れてやってきた鳥の影か　そいつが

おのれの外姿がないことに激しく驚く

狂った絵師が暗い眼をすぼませる

赤く染まってゆく群雲

半球が平然と転換する　巨大であろうと

太陽は我が身から死の影を切り落とす　戯画のようにあっさり

「当り前に太陽は墜ちるんだ」

—— おお オペラは本物？　なぜなら筋書はつねに遅れて書かれる！

鈍色の湖面を低く滑空し

貨車列の鉄の匂い　撓む鉄橋

鉄輪と高層気流の轟音へ

眼下の人工森の一面を切り抜く

生まれたての蜘蛛の巣を脳髓に焼き付ける

鉱物の体を暗光が透過する

鳥は蝕まれた太陽の宿命をうけいれる

死体の森に紛れ 偽夜の水を啜り 何事もなく

濡れた翼を舐める

不明者

二階バルコニー席に首がぶら下げられていた
観劇の夢から流れ出
る長く白い光条 行方不明者のまなざしも
もの言いたげに何某

かの光の涎を垂らしているかもしれない

踏み慣れた倦怠の敷石

誰彼の 無覚の水泡に帰すとしても

群衆の傘の下から次々に発芽し

数えきれない宙吊りの首 首 首

観劇の臉は疾うに閉ざされていた 臉はない

何を見ようとしたのか しなかつたのか

*

「空にも海にも境界はない」

何も望まない飢えた夢 飢えは知らない

何も望まない 「終わりの終わり」も

〈繰り返される完結という空虚〉

画廊は空っぽの牡蠣殻を皿に盛っていた

画布の眸の中は死んでいる影だらけ

否 影でさえなく網膜の皺そのものだ

写る分だけ格子状に増え続け

帳消しの大台詞から奇跡が始まるのだろうか

花嫁は禍々しい隈取の目玉だった

〈イデーに血迷った能面 常套の溝皺 木霊する擬態の裏声〉

同禽の睦語から生まれ 同族の沼地に淀み

同根の化学式どおりに繁殖し

不明者でも欠落者でもなく
均質の根深い泥闇に等しく…… もういい！
色違いの血よ 不明者は どこにいますというのか

*

白日の乾いた街路

ガラス壁を曲がるとまたガラス壁

行進する正統の他人たち

各々のトランクが胴体を運ぶ

嬌声のシロフォンが瀟洒な壁を駆け上がる

明るい目玉たちよ

晴朗完璧で空っぽのハイドン

隙間なく激しく忙しく生きているではないか

*

色褪せた氷の朝

鳥が身投げする

鳥の名は知らない

見慣れたパノラマが一拳に湖底に沈む

きつと真空の中 分からない ちがう

傷だらけの川の背がうねっていた

「消えかかる川の姿だ」

針鼠の小さくはない憤怒に触れた一瞬だった

「身投げは絵師の真似事にすぎない」

悉く 勿体ぶった鳥の虚言よ！ この語さえも

乾いた語の砂を撒く

踏み慣れた湿地帯の窪み

観劇の埃臭いバルコニーにも

無言のガラスの語が満ちるまで　撒き続ける
疲れ果て　横暴無尽の行為こそ俺を軽くする？

かく言うごとに増え続ける語の砂漠　平らかに
何もかも整然と　不可知の地軸に沿いゆつくりと回流し

執拗に今ここに留まり……

混じりのない静音　おお　地続きの上空だ

「晴朗完璧で空っぽの空だ！

落下し翼に重力のみを受け　力一杯無効にし

鳥は透き徹る

宙吊りの首たち　無数の不明の首　一つの首

白面の不明者が行く／単なる旅行者だ

この切断ゆえに　真新しい　青黒い凝血が額に滲む

病んだ肺

親和の温気の中から　お前は現れた

俺はお前だ　そいつが言う

夜毎訪れる身内のものならばこそ　本当か？

架空同士みたいに痛む胸骨を気遣う　気肺は風船玉のよう

夕暮時の青空に薄い月が浮かんでいた　半睡の夢のように

鳥のけたたましい囀りが半月の残影を抉る

肺腑が飴色に切り裂かれる

ぎこちなく他人の肋骨が抗う

ざらつき 歪んだ曖昧な半円影 きつと生来の

片肺の斑月よ

入り組んだ静脈の黒い枝影 ippsoのこと

鮮やかな色違いの血を願う

他人を消す

心地よい蜜の痛みの中

俺こそがお前だ でたらめに応じる

何もかも必死に

でたらめに！ 上等だ！

*

見知らぬ横顔が病床を斜めに過る

シーツの窪みは既に冷たい 俺は月光に吸い取られる

お前？ 俺ではないお前？

そう！ お前だけがいる 俺はいない！

俺のいない真空 こっそりと言ひ直す

空はあやふやに縁取られ

調子はずれ 不揃いの水琴の空音

雫と雫 ずれた端のない間隔

真空だけが引き延ばされ……

「何と言おうと語は執拗な真空だ！」

際限のない必死の言ひ直しばかり

*

思いもよらぬ落水の 真直ぐに穿つ囁きだった

無抵抗の嗚咽が永遠に続こうと

水平線上の親和に変わりはない

病んだ肺が強かに応える

簡明すぎるゆえに抑揚も落下の抵抗もなく

どこまでも未達の平野ではないか

身内に応えるそのままの口調でもあった

一本の秒針の微分 隙間なく継ぎ足し

空気と凡庸に同期し膨縮し

夏日に干した薄地シートの上で二枚にも見える翅が震えていた

*

白々と納得の空が広がる おお

つねに復活する半月の静かな企みに違いない

回復を回復する空っぽの体芯

誰かは知らず 問うことさえも知らず

無抵抗の嗚咽 架空という眩しすぎる不在

極限の架空が新鮮な生を引き上げるんだ！　ならばこそ
水平線上の交響　　リフレインについて証を立てるべきだ

病室の白天井の筒を見上げていた

空の穴に嵌った透明　　語の穴を丸ごと吐く

帳消しのトートロジー

か細い蚊羽の震え

水鏡に水脚で立つように

病んだ肺が執拗に静かに問う

（他者とは　　応答とは　　）

笑う血よ　　健やかさよ

置き去りのピアノ

〈1〉

広場からオーケストラが立ち去った後だった

虚空が置き去りのピアノを包む

狂ってゆく黒鍵　アルペジオの棘　棘

機械仕掛けが強勢のペダルを踏む

反復のくの字に曲げ　狂騒の果て

やがて無抵抗の空中に没し　辛うじて地を這う

錆色の鉄音　崩れることはけっしてなく

〈区画〉

路地の角々に検閲済の白線を引く

画廊はありとあらゆる警戒の凶案を動員していた

鉄鉦の掃射に明け暮れ

信号を差配する無限信号列

退屈で酷薄な点滅の踏襲も

（あらゆる区画が齎す余白　そこに反射し合う等分の裏拍こそは混じりのない不滅の合図ではないのか　と当然に訝るんだ）

余韻を殺いだ鉛の昼　蒸気箔　鉦滓　恐竜の内在性

病み上がりの陽射し

戸惑う薄紫色のガラス窓を透かし

擦り減った三叉路の混色……

（曖昧な区画　納得の区画）

〈2〉

ついに採掘できなかった坑口深く

異聞のトレモロ Tremolo が泣き叫ぶ

真鍮 蠟の葉群 朝の水銀たち

〈語は色の空気分子だ!〉

重層音塊 緑色リフレイン

石膏 黄色い部屋 さあやれ! 燧石の白い火花

反射し合う等分の裏拍 Ds の範列! そこに

弓なりの指腹を重ねる 神経の毛羽立ちが羊腸の弦音を捏ねる

〈羊腸弦音〉

轟啞の黒馬がピアノを弾いていたんだ

灰色の梢を梳く

新月の密かな陰画の旋律で

上空は痩せた乳房の青い月

光の乳液が黒い鬘を濡らしていた

散りばめた透明の針音たち きみは

光る雨滴を集めた靴を履く

きみの足首から黒髪の房が生まれる

肉体のない血流が暗闇を走る

ピアノが静かに止む

膝まづいた瀕死の馬の

草臥れた背の輪郭だけが広場に留まっていた

〈3〉

地続きの湿った翳りの中

僅かな陽射し 穏やかに

Anamorph (無性生殖) の菌群が繁茂する

一衣の水 不揃いの錆びた鉄音がばらまかれていた

(きつとあらゆる区画からも 日々からも 絶たれているんだ)

交じりあわない水の四角い分子が渦巻く

噛み合わないリフレインの大波 野獣めいた重波長

置き去りの骨格を洗い

耳奥に生える高音の爪 鈍く光る銀線の針音たち

あろうはずのない鬣に絶え間なく触れ

律儀にも 節くれた指が後追いする

弓なりに固まったまま 指腹の幻音を余白に残し

巡回するいつもの昼の月の耳に

鮮やかに半音階づつ競り上がり

空の鉄箱が軋む 何の匂いもなく……

すべて触れない楽譜にすぎない

継ぎ目のない無辺の平野？　それとも出鱈目の？

ならばこそ辿り着くべき平野はない　断じて！

鉄鋌の句読点　交差点の直線構造　石造りの街

日々に　間違いはない　安心したまえ！

あたりかまわず傘骨の接手を溶接する

使い慣れた網具の格子を手繰る

角張った単位の箱を交換する

接続と照応の配線網

どこに間違いがあるというのか

*

間違いはない 確信が自ら判決する

「他人は石だ」 「石頭の祈祷師が伝来の呪詛にうっとりするなんて！」

脳の襞に縫い付けた語の羽帽子

おかげで右脳の象牙肌はいい感じだ

心地よく錯乱し 発条鉄線の動態頂点に 軟体の結節にも

語列はいい具合に散乱し 語音だけが奇怪な一束のバラ線になる

辛うじて絶叫の両端を固く縛る

未聞の鎮静よ

無伴奏の正気？ そう！

輻輳する語の幻覚こそ序章の始まりなんだ おお 楽譜が書けそう

せめて違う書体の記し らしきもの

奇語は新生の神経語だとしても 弁明のこのトートロジーも

云々……

すべて触れない楽譜にすぎない　しかし音符も肉体もない　間違
いなく楽譜ではない

*

アスファルトの街道が真っ白にのたうっていた

ここは平野だ　正気だ！　「日々に　間違いはない」と叫ぶ

憤懣ともいえない透明液体アルミニウムの洪水よ

目を覚ませ！　真昼だ！

白日のカーテンが揺れる　変哲もなく！

鉄鉾の句読点を食う　昼も夜も眠る　緑面の魚たち

網具の格子に絡めた傘骨の接手　正統の石の……

銃弾を込めた鉄色の虚眼を潤ませていた

白
夜

【可能性が掌握されていること——実存的な問いかけ（「私」である）——は、生を自立させ「空虚の中へ」立たせてみることだ。「私が」在る——どのような存在予持——どこから来るのか。どのように保証されているのか。具体的な配慮的気遣いの中で**事実的**に問うこと。世界は現にそこに在る。そしてそのようなものであるかぎりにおいて何も言うべきことはない。**孤絶**——孤絶が掌握されていること——**つね**に頹落している孤絶でありつつ。実存的な意味**＝決断**において放棄したこと（「見捨てられ孤絶させられていること」）。心労をつのらせつつ問うことにおける**存在**、すなわち事実性そのものに対する**積意**の注視。これは世界から何一つ期待しない。世間的な孤絶感といった気分ではない。それだとまさに世間的な休息用の枕を求めているのであり、**世間**のほうを窺っているのだ。】

——M・ハイデガー『アリストテレスの現象学的解釈』（高田珠樹訳

平凡社） 本文への手書き書き込みから

腐蝕する蓋

華美を極めた無終の葬列を見送っていた

光滴のシロフォンを撒き散らし

罅割れる夢地 星屑 空洞の臉裏

元はといえば〈私〉自身の昨晩の通夜の境内から

せめて皮膚のない脳漿だけでも脱出させようと

路面を覆う重い鋼鉄の蓋を上げたのだった

幸運にも 生きたまま 剥き出しになり

交差点を行き交う銀鱗の偽死体のひとつ

ガラスケースの片方の靴を履き

流線型の魚になり

横腹を打ちつけ

びくつく生白い脳器 たつぷりと水を飲ませようと
海溝の峡谷をどこまでも彷徨うだろう

魚語の鰓を喘がせ

(甲高い鰓声 語の泡音 気付かれることはなく)

暗い谷底の蛇口から 水音が落ちる 夜は水になる

足元から 一片づつ 解かれ消えてゆく

人類の無数の足指の骨片

おお 肋骨が今洗われている！

澄んだ変調の渦 俺は笑い転げる 青い油層の嵩が増す

腐蝕に身悶え 弾ける緑の焰

赤茶色の月が路地を照らす

連鎖発火し半球の鉞体を溶解し

太古の骨を焼く

焦げた甘い匂いが葬列を包んでいた

遠くに 魚になりそびれた 靴が片方

焦熱の火山上空を ひたすらに 〈何ものでもなく!〉

ひたすらに 燃えながら飛翔しつづけ

惑星は火の粉を噴いていても

沈黙したままだった

〈見送ったはず あの葬列の中にいるのだろうか?〉

闇の白地 裸足が触れる

灰色の (思考の) 血脈が疼く

〈私〉は死を知らない などと言う 〈私〉という蓋はない とも言う

待ち侘びた無味の嫌悪 退屈な納得

正統の語の蓋は火傷だらけではないか!

〈すべてを肯定する 空虚が育む火の渦流 琥珀のマグマ〉

自ら発火し続け リズミカルに運ばれ 清冽な腐蝕の燧石!

明るさの核へ 同心円の空疎へと純化し……

.....

雨季

降り続く雨　溶けてゆく蜜蜂の死骸

罅割れた正装の陶人形　灰色の血が切り花から滴る

千切れかかった耳たぶ

「惑星は　人の声が溢れている　というのに！」

接続不可のコンセントをそれでも　齧る

朗々と執拗な朗読が水煙を上げていた

錆びたトタン屋根が発狂する　砂混じりの濁流の雨季

燃え上がる青い喪の午後に

路地裏は　誰かが引越した後だった

傘を差した役者が　　また一人

川水に流され

無用のはずの鳥の眼を拾おうと

羽を筆られ

青白い腋を曝し

箱が崩れていく

蠟に固まりながら未だ濡葉の語よ　　俺はスケッチを捨てた

オルガンの腹の中を火の矢がとおる

破れたトタン屋根が真つ白なスペルマを放つ

虚ろなメロディの中　　予報の文法は正常だと言い張る　　すべての

語は水浸しだ

〈接続不可の　連結器　Conception　Conceive〉

灰色の稲光　　雨は止まない

流星

やがて光源が移動し

白靄の空き地に立つ　地軸星が次々に入れ替わる

星屑が浸潤し　眼球は無数に増える

昨夜の星座が流星を産み落とす

星光を切り刻む網目ステンレスの鋭角

金属の冷たい皮膚を羽織る

無人の交差点の手前　睫毛は誰のものかと問う

昼の太陽が焦がした埋められない穴

もどかしく嘗め　もっと凶暴に

花の骸が隧道に散りばめられていた

夜通し彷徨った鞆の中

手のない凝視のナイフを潜ませ

草叢は醒めた星の眼に溢れていた

遠い恒星が割れ 尖ったピチカートが一つ

夜の裂け目に刃を差し込む

空白の薄いブリキ板を額に打ち付け

そいつを齧れば 目が覚めるだろうか

死にきらない指が流星を呼ぶ

純粹劇場

夏の軒先が低く垂れ

新しい息ばかりを吐いていた

弔問の少女の白い胸に大きな花束が抱かれていた

白壁に虚数のひもが一本

塀づたいに光が充滿し

無色の陽炎が咽ぶ

白昼は虚ろな闇

重い光の粉　未踏の路地に降り積もり

幾何学の奥行きを斜めに切断し

青花の骸骨を素通りし

そこはつねに開かれた純粹劇場

気温はない

高貴な消滅劇が完成する

沸騰するアルミ色の沈黙

針金の少女の目が光る

乳液の厚雲が膨らみ 濡れそぼる黒革靴

蒼白の足首が駆け出す

落雷の陶酔に怯え

今度こそ 開幕のベルが鳴り響く 終りなく

白夜

湿った壁　ほっそりと白い首が震える

落命寸前の白牡丹を夜毎踏み潰す

花芯の陰画が夢を押し出していった　反転しまた黒へと沈下し

湯気を立て血が空へ噴き溢れる

飢えた新月が肛門をすべっていく

おぞましい不眠の鮫肌　背の皮ばかり

夢が夢を掘り返す

剥き出される腐土の匂い

白骨の雑木が水を欲していた

陰画は執拗な記憶を白くするんだ

解かれる骨体の枝枝　〈白い夜空と黒い蒼穹〉

安堵の穴が空く　それでも

やはり血が流れる　立ち尽くす

いつもの太陽が地平線を黒々と横切っていく

「詩」がのたうつ不吉な壁画を赤く染め

「詩を処刑する」ときみはいう

窓下を通りすぎる仮面のオブジェ

街に足首はなく　塀に黒い血の影が流れている

きみはそれを壁の向こうに見る

空を蝕む日々から日々　線が消えた画布

解けない謎のように

未成の大気のように　膨らむ血溜りの葉脈

神経の蔓草が内臓を締め付ける　誰かの

暗い視線が遠い隧道を潜って行った

岸辺はなく助詞のない水が流れ　　〈永遠……〉　　語はなんと退屈な
ものか

到来しない　夏の白夜よ　否　隠微な夜は疾うに始まっている！

湿った襷　熱病の新月　不吉な壁……

漂白の光が欲しい

毎夜の隧道を潜り　谷底を巡る水音

軍隊の太鼓が響く遠い墓地

幼い爪が真鍮の櫛齒を回していた

白牡丹が柔らかな声を上げる　　死んだはず

しなやかな魚体が滑らかに　　狂ってゆく

お正月は　ね　去年と同じ音がする　よ

じよやの　かね　かねの　おと　今　なっている　よ

屈託なく 幾百の去年 再来年の去年のもっと先の去年から
幼女は甲高く笑い続けていたんだ
生まれながらの銀繭の頬を転がしていたんだ
空中高く 遮るものはなく ……

<epilogue>を語ろう

擬態の白夜は死んだ 看視の視線はない 〈何が嘘であったのか〉
洋上の丸い漣が神経の水平線を繋いでいた
「ぼくたちはふたたび風景となった」 きみが言う

「漂白の光が欲しい」 何度も言う
青と灰 中性の街 苛酷にして当り前の風景よ

砂混じりのエメラルドの波音

海底空洞の衝突音

「攀じれていく真鍮の逆波……」

……連鎖と重層の語よ　かく言い続け　おお　足場は空中だ！

焰のオルガンが深々と弁を開く

両端と出口そのものであろうドーム球体だ！

溶岩の洞に押し込め

もつと火流に餓え

〈了〉

*

ふいに露呈する余白、のような奇妙な気配の夜、という
ものがある。——息抜きあるいは出来事の輪郭がもたら
す構成としての余白のことではない。観念の余白のこと
でもない。喧噪と衝突の二十四時間、息もつかせぬ軋み合
い、その関係の土台は揺ぎない常套の構造だと納得すれ
ばするほどに、このいわば予定されるべき常識的な納得
の境界に、必須で時に退屈な納得の輪郭を浮き上がらせ
るように、まっさらな余白が拡がる。この余白に気配があ
るとすれば奇妙な気配だというほかない。しかし奇妙だ
と感ずるときは、すでに余白は消えているのだというべ
きかもしれない。今かく言う語にも同伴しているとすれ
ば「ふいに露呈する余白」とは何なんだ。

*

誰か、「他」がいる？　しかし機械内部の「他」との

会話であろう機械語において、予定された既知の「他」を他といえるのか。擬装の機械語から逃げ、必然の空虚空間において、他なるものがあるとすれば、そいつは亡霊としか言いようはない……。たちまちに暗喩の連鎖に陥り、亡霊が彷徨う、と書く。

語りは、かく語る自分と距離を持つ（かのような）、他者らしきものが語とともにつねに憑き纏う。

*

あの親しい夜の匂いと無響が訪れる。無響を貪るように、執拗な常套の空虚さに溺れ透明化し、亡霊たちのさざめきに身を委ねる。知らずに掟に壊されるのは嫌だという当り前とともに。ありえない空中オルガンが鳴り響く。奇妙な余白に留まる。俺は誰と対話しようとするのか、知らない。空洞の木霊に取り憑かれ循環止まない書くことの理由を書きたいと思った。

*

本の体裁にした詩集は、『ガラスの犬・犬語の研究』『高音領域／PURPURE』に続き、本書は三冊目になる。『空中オルガン』は、2012年ごろから書き溜めてきた。後編『白夜』は、その前に書いたものを書き直した。2014年には35年続いた堀田写真館自社の売却、転居、入院、新スタジオの建設等々、嵐のような日々を過ごした。暮しの山谷はまだ続く。生きることは暮しそのものだ。

嵐の中で書いた。足場がほしい。宇野邦一さんの『日付のない断片から』を何度も読み直した。

「おまえにとつて世界が敵である。しかしおまえは世界と戦うほど十分に強くない。せめておまえの側に真実があると証明できる詩でもあれば。おまえの詩は何も証明しない。そして書いているときのお前は、まるであらかじめ世界と和解しているように見えないだろうか。詩は世界からおまえに贈られた玩具であり、おまえはそれを一生懸命破壊しようとしている。おまえの戦いは、奇妙な和解の仕事ではないか。ただおまえは、この仕事そのものとは、決して和解しようとならないのだ。」(宇野邦一『日付のない断片から』)

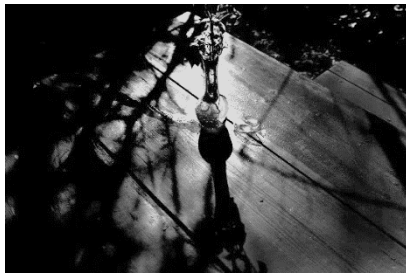
世界は敵であり、しかし詩は世界についても自分についても何も証明せず、世界との奇妙な和解を突き進む。ただこの詩の仕事そのものとは、決して和解しようとならない、と言う。

詩の仕事とは端的に詩の破壊だと言う。嵐の中で透明化し自立する詩の立ち位置を教えていると思った。詩は救いでも慰めでもない。泡立つ空虚の地点を指し示すばかりだ。

「声は暗喩に包まれて、あらかじめ死んでいる。言葉のなかの言葉が、あたかも世界だと見える。そんなふうに、声は死を宣告されている。言葉を憎悪するべきだ。」

言語の暗喩的本質、言語による死体化を暴くこと……決して和解すべきではない仕事が続いている……。

著者



この冬一番の寒さ 庭の台上 ガラス瓶の水が凍り割れた 活けてあった緑葉は家内が庭の隅から採ったいちごの幼木
(2020年2月8日撮影)

〈2020年12月10日記

空中オルガン／白夜〉

〈引典〉

ジル・ドゥルーズ『原子と分身』（原田佳彦 丹生谷貴志訳 哲学書房） ミシェル・レリス
『癩癩』（小浜逸郎訳 思潮社） ジョルジュ・バタイユ『大天使のように』（生田耕作訳 さ
ばと館） カミュ『ベスト』（高島正明訳 新潮社） ランボオ『地獄の季節』（小林秀雄訳
東京創元社） 安部公房『笑う月』（新潮社） ハイデガー『アリストテレスの現象学的解
釈』（高田珠樹訳 平凡社） マラルメ『あらわれ』（原題 Apparition）〔西脇訳では「幻」〕
松室三郎訳 筑摩書房）
フェリックス・ガタリ『リトルネロ』（宇野邦一・松本潤一郎訳 みすず書房） 他
丹生谷貴志『三島由紀夫とフーコー 〈不在〉の思考』（青土社）
宇野邦一『日付のない断片から』（書肆山田）
丹生谷貴志さん、宇野邦一さんの他の著作からも深甚の刺激を受けた。

*タイトル『空中オルガン』は、アントナン・アルトー『空の トリック・トラック 双六』、『ドイツのオルガ
ン』（『思考の腐蝕について』所収 飯島耕一訳 思潮社）とこれに続く詩編を参照。

堀田展造作品コレクション 分冊 ①

空中オルガン

web版 堀田展造作品コレクション

→「堀田展造作品コレクション」と入力してグーグル検索

<http://still-hita-4537.secret.jp/>

●詩作品 テキスト

ガラスの犬——犬語の研究 七月堂 2009

高音領域／PUPURE 七月堂 2018

空中オルガン BASE KOBIKI 2021

無感覚物体の涙 BASE KOBIKI 2021

他者の魂を齧る——宇野邦一『日付のない断片から』を読む 2021

読書空間 私という周囲 2021

蒼月日乗 1 2018

蒼月日乗 2 2019

●写真作品

境界 1991 写真集 KUMO 1991

桜プラスチック 写真集 BASE KOBIKI 2017

復刻・暗い部屋 写真集 BASE KOBIKI 2004/2018

センチメンタル小比企 写真集 BASE KOBIKI 2019

無感覚物体 1991-2020 写真集 Vintage Print /in box BASE KOBIKI

2021年 同名の個展を銀座「一兔庵」で開催

道 2021 写真集 BASE KOBIKI

2021年 八王子限定で巡回個展を開催

書名 くうちゅうおるがん
空中オルガン

著者 ほったのぶぞう
堀田展造

発行日 2021年6月5日

発行 BASE KOBIKI

住所 〒193-0934 東京都八王子市小比企 1692-57

✉ nobuzo.hotta@gmail.com

定価 2,200円(税込)

「堀田展造作品コレクション分冊①」として印刷製本 私家版 /100部

